

秀 賞



髪の毛の寄付

山形県山形市立第十中学校

一年 大城 結月

「十五センチメートル以上だから大丈夫だよ。」いつも髪を切っていたら美容室のお姉さんが声をかけてくれた。この夏、私はヘアドネーションという髪の毛の寄付に挑戦してみた。

この言葉を知ったのは、何気なく見ていた夕方の県内ニュースだった。いつも行っている美容室がテレビに映し出され、ヘアドネーションという活動が紹介されていた。目と心がくぎづけになった。それまでは「ヘアドネーション」という言葉すら聞いたことがなく、「知らない」という理由で聞き逃していたと思うと、もったいない気がしてならなかった。以来私は、夏休みを利用して、様々な情報を集める日を過ごした。

ヘアスタイルに特にこだわりはなく、毎日一本に結えばそれでよしという習慣がついている私。髪の毛が多いため、美容室に行ってもいいから、また何か月かしてすいてもいいから、この繰り返しだった。しかし、ホームページで見つけたヘアドネーションを経験した方の言葉に、心が動いた。

「髪を切ろうと思ってるみなさまにお願いします。どうかその髪の毛を子供たちのために役立たせてください。」

私は髪を寄付することを決意した。髪はまたのびるものであり、この私の髪で少しでも心が楽になる人がいるのなら、ぜひやってみようと思った。とは言いつつも、今まで十五センチメートルも髪を切ったことがなかった私は、多少不安な気持ちもあったが、「ヘアドネーション希望です。」とはつきり伝えることができた。

私が寄付した髪の毛の行き先は、病気などで頭髪に悩みをもつ十八歳以下の子供たちに完全無償でウィッグを提供している、NPO法人である。

私はバサッと髪を切られた瞬間、考えたことがある。髪に執着心がないが、それは、髪の毛の長さやスタイルをいつでも変えられる「自由」をもっているからこそ言えることなのではないか。何らかの理由で髪の毛を失っている人にとって、髪の毛一本一本に對する思いは計り知れないほどのものだと思う。今回私は、ただ無造作に一本に髪を結っていることも当たり前のことではないと実感した。

調べていて一番驚いたことは、子供一人のウィッグを作るのに二、三十人分の髪の毛が必要であるということだった。多くの人の力が必要だということを知って知った。また、髪の毛を染めている人、パーマをかけている人、縮毛矯正をしている人でも大丈夫と書いてあったのには驚いた。寄付したいと考えれば、誰でもできることだと改めて感じた。

髪の毛の最短の長さが三十一センチメートル以上必要と書いてあったのには理由がある。ウィッグベースに植毛する時に髪の毛をVの字に折って植えていき、約十五センチメートルのボブフルウィッグに仕上がるということだからだ。また、十五センチメートルあればできるヘアドネーションとは、頭頂部には植毛せず、帽子をかぶって隠し、そのまわりに使用するそうだ。どちらにしても、この私の髪の毛で誰かが喜んでくれればうれしいと思っている。私は、ヘアドネーションというものに偶然めぐり合うことができたが、これを機に様々なアンテナをのびし、これからも誰かの役に立てるような挑戦をしていきたい。

これまでの私の「挑戦」とは、自分自身の目標を達成させるためのものが多かった。それは、言い換えれば、「自分のためだけの挑戦」だった。しかし、ヘアドネーションという経験を通して「知る」ということの大切さ、そしてどんなに小さなことでも、少しの勇気と一歩を踏み出す行動力があれば、「誰かの役に立てる挑戦」もあるということを実感できた。

短い私の髪は、数カ月も経てば再び長くなる。それは当たり前のことのように思うかもしれないが、決して当たり前ではない。一人でも多くの人の心に希望を与えられるのなら、これからも私は誰かの力になれる挑戦をし続けていきたい。